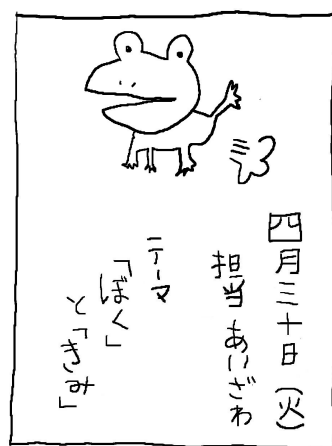


Title	「ぼく」と「きみ」
Author(s)	會澤, 久仁子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 16-17
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/11247">https://hdl.handle.net/11094/11247</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



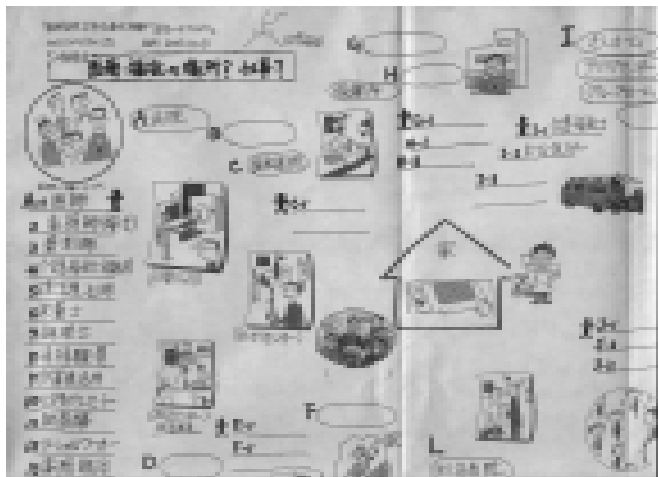
## 5 時間目 医療・福祉の場所？仕事？

次週より理学療法士や看護師、介護士の人たちが来て、人の誕生や性、障害、老い、死について授業をすることになっているので、その前に医療・福祉の領域と職業について概観し、その広さと多様さに気付いておいてほしいと意図して、この授業を行った。

授業では、医療・福祉の場所と職業についてイラスト入りで穴埋め形式にまとめたプリントを用意し、場所と職業について思いつくものを挙げていってもらい、その間に関連の説明や話題を挟んだ。順に当てて答えてもらったのだが、二、三順目くらいから考えるのをやめて、寝たり、黒板に書き出された答をただ写そうという生徒たちが出てきた。それでも、人間ドックのイラストがコインランドリーに似ているとの指摘や、人間ドックは「ドック(Dog)」か「ドック(Dock)」か」と質問が出たり、「医師」との答えを期待したところに「院長」との答えが出たり、いくつかの思わぬことに戸惑いつつ感心した。またこの4月から「看護婦」から「看護師」に職名が変わったことを知っている生徒もいた。私が見学したことのある

養護施設についてパンフレットを見せて言及したときには、さっと集中してくれたが、私自身がうまく突っこめずせっかくのチャンス逃してしまっただ。答の穴をいくつも埋められないまま残して、最後にこの授業の意図を口頭で説明して授業を終えた。

反省点として、答えてもらう穴をもっと絞る必要があるとわかったし、この授業のまとめを書く欄をプリントに設けて少し考えてもらう時間を取り、「医療・福祉の場所はあちこち広い。そしていろんな仕事がある。」などと書かせるのも、授業の意図を知らせるのによいと思う。さらにテーマにあまり関係のない生徒たちの興味を引くもの(例えばクイズ的なイラスト)ももっとあればと思う。また同様の授業をする機会があればこれらの点を改善したい。



## 6 時間目 「ぼく」？「きみ」？ 『かんがえるカエルくん』を読もう

『かんがえるカエルくん』(いわむらかずお作 福音館書店、1996年)のなかの「ぼく」というお話は、カエルくんがネズミくんと一緒に「ぼく」と「きみ」について考える哲学的な作品である。言葉も4コマ仕立てで進む絵も、とてもシンプルで工夫されている。しかし内容をあらためて理解しようとするときくわからなくなり、途方にくれるほどだ。この本を授業と一緒に読んでみたい、どんな反応をしてくれるだろうかと思いい、授業を試みた。

作品「ぼく」は、「ぼく」と「きみ」とは何かという問いと、「ぼく」と「きみ」の表現の多様性(例えば「わたし」と「あなた」や、「せつしゃ」と「おぬし」)についての問いとの二つを含んでいる。一通り読むことも考えたが、それは無理だと授業案の検討会でアドバイスされ、前者の問いの場面に絞った。また内容理解のために、場面を分けて内容を要約するプリントを作った。これも指示が伝わりにくくまた難しく生徒たちがどうすればよいかわからないと検討会で指摘された。しかしよい改善策がわからず、結局プリントには「絵本で言われていることを、自分で下に書いてみよう。」と指示した。さらに全体用に絵本の場面を二倍に拡大カラーコピーしたものと、要約時に手元に配るコピーを用意し、読む練習もした。

当日は、絵を広げると生徒たちは興味を持って見ている。しかし要約についてはやはりなかなか指示が伝わらず苦労した。それでも、例えば、カエルく



んは『ぼく』であるとか、とにかく何か自分でまてめてみて。」など何度も説明すると、取り組んでくれ、うまくまとまらない答えもあったが、よくできたものもあった。二つに分けた場面について場面ごと二人ほど自分のまてめを読み上げてもらい黒板に書き出し、簡単に検討して、要約を確認した。私が押さえたかった作品の内容は、第一場面では「カエルくんもネズミくんも『ぼく』であり、『きみ』である。また、『きみ』と呼びかけると相手は『ぼく』であり、『ぼく』ということは相手に『きみ』と認め

られることである。」第二場面では、「ぼくがいるから（いてはじめて）、きみがいる。そしてぼくは、きみがいるから（いてはじめて）、きみのきみになる。（つまり、ぼくは一人ではきみになれない。）さらに、ぼくはきみと呼ばれなければ、ぼくになれないのではないか。（つまり、ぼくは、きみのきみとしてはじめて、ぼくなのではないか。）」であった。しかし第二場面の途中で避難訓練が始まり、授業は中断となった。（避難訓練があることは授業のはじめに生徒たちが教えてくれたが、その開始時間はわからなかった。）授業をまてめようとして、『きみ』や『ぼく』、『わたし』や『あなた』って、普段は当たり前で意識していないけど、不思議だよね。」と言いながら、いや今はそのような場合ではなくすぐ避難訓練をすべきだと気付く。私も生徒たちと一緒に避難訓練をしたが、教務手帳を教室に置き忘れた。素早い判断力や学校の先生としての生徒への責任について思わず反省させられた。（なお集会時に生徒たちが静かに並んでいたことにも感心した。先生たちの指導が上手なのだろう。）

授業は途中になったが、プリントの最後に「感想（読んでどんな感じがしましたか？ 授業はどうでしたか？）」の欄を設けておいたところ、「難しかった」「よくわからなかった」というのとともに、「別に全々（△）意識していなかったけどよく考えたら不思議でもしろかった。」と書いてくれた生徒もいた。「てつがくのだと思った。」というのも。次回の授業の冒頭を借りてあらためて私がこの授業で伝えたかったことを述べた。つまり、みなそれぞれ「わたし」であり、「あなた」であるというのは当たり前だけど、あらためて考えると不思議で驚きを感じ、それを一緒に感じたかったこと。そして、「出会いの

てつがく」のどのテーマでも社会生活のどの場面でも、きつとみなそれぞれ「わたし」であり、「あなた」であること、言い換えると、人がいて自分があり、自分がいて人がいることを、少し意識してみてほしかったこと。私が話しているとき、生徒たちは一方でしゃべりながら、もう一方で聞いていたのだろうか。「わたし」と「あなた」という当たり前のことに、何か本質的なことがありそうだと感じてもらえたら良かった。

実際に授業をしてみて、プリントの改善点もわかった。場面をさらに分け、いくつかの場面はあらかじめ要約を付けておくことで、要約の仕方を例示する。そして最も考えてほしい点を絞ってそこだけ要約してもらおう。また、もっと時間をかけてこの作品を読むこともできるかもしれない。各自の要約を互いに確認し、理解しあいながら、共同で作品の要約と理解を磨き上げていく。これができるれば、この作品を媒介として哲学的な対話ができるのではないか。（あいざわくにこ）

